

# 戦争体験記

広畑花世

▽戦火は足もとまで

大東亜（太平洋）戦争は、ますます熾烈（しれつ）になりました。内地から満州へ来られる人が多くなりました。しかし、内地へは帰れないと聞かされ不思議でした。急に、満州人の古着買いが増えてきたのも不思議でした。昭和二十年八月七日、日ソ不可侵条約を一方的に破棄してソ連が宣戦を布告してきました。

状況でした。預金を引き出そうと思つて行つてみれば、郵便局も、銀行も閉鎖されておろり、がっかりして帰り、悔しい思いをしました。数え年十二歳の長女、十歳の長男、七歳の次男、三歳の次女、一歳の三男の五人の子どもを連れて途方に暮れました。警察、軍人、満鉄（満州鉄道）の家族は、毎日、避難列車で疎開して行き、一般人だけが取り残されてしまいました。まだ、主人の行き先の連絡もありません。社員や家族の方々が次々と

頼つて来られますが、私自身、何の方針も立ちません。子どもたちと死を覚悟しましたら、案外気持ちは落ち着いて、疎開して行かれる方たちのおにぎり弁当を作つては送り出していました。

国境から牡丹江までの距離はわずかです。空襲警報の鳴った時には、もう爆弾が落ちています。初めはパラパラとして、きれいだなど眺めていると、爆弾と分かりびっくりしました。

そんな中、八月十二日、ソ連の戦車が轟音（ごうおん）を立てて侵攻して来ました。生きた心地もなく途方に暮れていた時、主人が「解散」になつて帰つて来ました。

聞けば武器もなく、小学校に待機させられていたとか。主人は早速、社員と現地で召集された社員の家族